





国語問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二五ページまである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。(解答用紙は表裏両面にある)
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

1954年12月
第12次印刷

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

①「異時同図」という言葉がひところ美術史で唱えられた。ひとつの画面に複数の時間の相が同時に描かれているとき、それを突出した、例外的な事態として論じる場合に、ある時期使用されてきた専門用語である。たとえば具体的な例として、十二世紀に成立した『信貴山縁起絵巻』をとりあげてみよう(図1)。

この『絵巻』の最終巻では、主人公の高僧命蓮の実の姉にあたる尼公あまきみが、二十年前に信濃国で別れたきりの弟に会おうと思いつく。彼女は東大寺を訪れ、大仏の前で一晩の参籠をはたす。はたして夢aのタクセンが下り、尼公は一路信貴山へ向かって歩きはじめ。

『絵巻』はこうして挿話を、巨大な大仏殿と小さな尼公を対照的に描くことで、巧みに物語っている。といっても一夜の長さにならなくて起きる事件を一枚の大画面に収めるためには、それなりの工夫を施さなければならない。より細部を眺めてみることにする。

図1は、大仏殿の手前だけをクローズアップしたものの模写であるが、ここでは都合五人の尼公が描かれている。日本の絵巻物の法則に従って画面の右から左へと視線を移動させてみると、それが当の尼公の行為の五つの相であることが判明する。一番右で彼女は **A**。次に彼女は大仏殿の外側にある石段のうえで眠り、さらに(迎え入れられてか) **B**。その左に描かれているのは、 **C** 尼公。さらにもっとも端には、 **D** 彼女の姿である。紙面の関係上ここで切ってしまったわけだが、実物の『絵巻』ではこのあと、尼公が **E** 姿と、さらに遠くへ行つて、もはや大仏殿など見えなくなつた地点にある姿二点とが加えられており、合計して尼公を描いた八個の映像が、この一夜の物語を語っている。

絵画とは固定した視線によってある特定の瞬間を捉え、その光景を克明に描きだすのが本来の姿である、という、従来の素

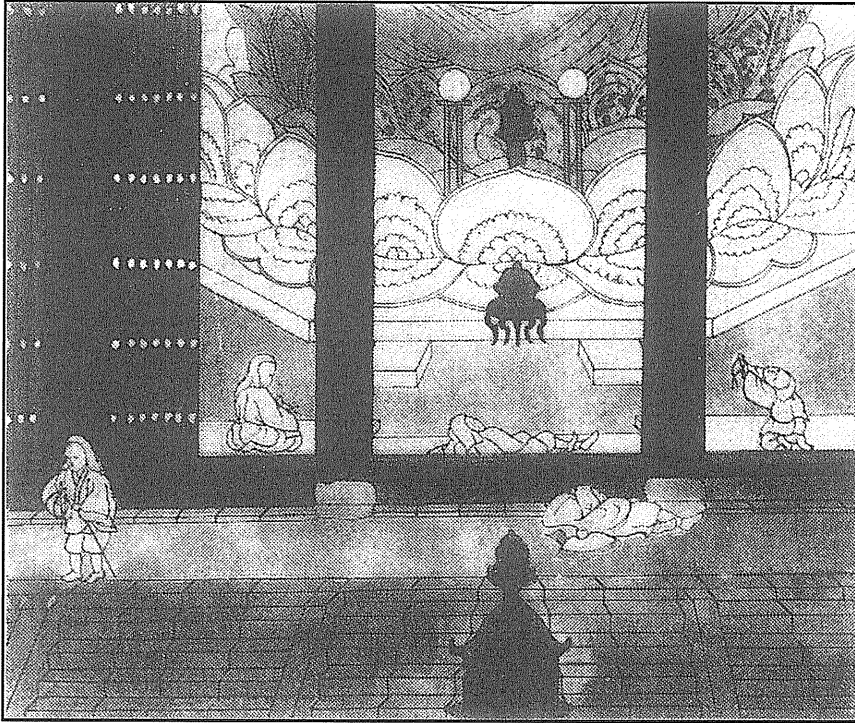


図1 『信貴山縁起絵巻』「尼公の巻」より(絵・高瀬省三)

朴な立場に立つならば、ここに描かれているのは逸脱以外の何物でもない。だがひとたびそうした通念を脇に置いてこの画面にじっくりと向き合ってみようではないか。ここで独自の時間と映像の関係が実現されるとわかるはずだ。同一の空間を借りて継行的に行なわれた動作の全体を、一平面において共時的に語ってみせようという工夫がなされているのである。

『信貴山縁起絵巻』はほぼ同時代に成立した『F』と並んで、しばしば日本の漫画の原点であると指摘されてきた。もともとそのとき言及されていたのはもっぱら対象を描くさいの諷刺性、おかしみ、滑稽といった主題的な側面か、でなければ躍動感に満ちた省略画法といった筆遣いの側面にかざられていて、こうした異時同図のあり方を漫画の遠い先達と見るといった、説話上の様式性の問題はどちらかといえばトウカンシ^bされてきた。とはいうものの、連続する時間相において生起する映像を同じひとつの画面に収録するという手法は、優れて八世紀後の漫画の文法を先取りしているというべきではないだろうか。

漫画における物語の語られ方を考えるときもつとも心掛けるべきこととは、漫画に先立って、別個に自律した物語なるものが存在し、それが一定の手続きを経て、手際よく「漫画化」を施されるわけではない、ということだ。漫画には漫画に独自の説話行為のあり方が存在しているという、厳然たる事実といってもよい。前章より画面とコマの分割について論じてきたが、漫画的な説話の根底にはこの問題が大きく横たわっている。

たとえば漫画のなかに流れている時間はけっしてわれわれが日常的に体験している時間でもなければ、演劇や映画の時間とも異なっている。コマの絵柄を追う時間。風船(吹き出し)の位置と順序を見定める時間。風船の内側の文章を読む時間。次のコマを探し、そこへ移る時間。一画面のなかのコマを視線で走査し終わったのちに、全体を画面として統轄する思考の時間。見落としたコマ、読み落とした風船に戻ったり、好きなだけ繰り返し同じコマ、同じ風船に視線を留めるための時間……。書き出していけば際限がないが、時間にして八分の一秒とか、十秒とか、さまざまな長さとしてレヴェルをもった時間が幾層にも絡みあい、重ねあわさり、連結しあつて、漫画の時間を全体として構成している。それは描かれている物語のなかで登場人物たちが体験するはずの時間とは、根本的に次元を異にしている。

漫画において本稿の冒頭に論じた異時同図が、ひとつのコマの内部において実現されている例を、ふたつ掲げてみよう。

さだやす圭の『ああ播磨灘』では、主人公の力士が取り組み相手に強引に下手投げをかけようという緊張感に満ちた光景が、一頁の半分を占めるコマを用いて描かれている(図2)④。

二人の力士の激しい動きをより強い臨場感のもとに描くために、漫画家はもはやコマによる絵の分割に訴えることをやめ、同じコマに運動の三通りの相を描きこんでいる。一見してわかることであるが、この三相は同じ視座から眺められているわけではない。それぞれが絵として重なりあうことなく並び、全体としてコマ全体を覆ってしまうように、視座はそのつど土俵の周囲を廻っているといつてよい。もつともそれが結果的に力士たちの動作をより誇張して見せ、あたかも彼らが土俵の内側で恐ろしい速度の回転運動を行なっているかのような印象を与えることになる。下手投げを決めようとして土俵の中央へつんのめるように激しい動きを見せる、播磨灘のヴェクトルだけが物語としては現実のものであるが、漫画はそこでありえない回転運動を演出してしまい、全体としてこのコマのなかに、複数の力が錯綜し共鳴しあうといった状況を作りあげること成功している。それはいささかも現実的な要請に基づいたものではないが、読者はここに圧倒的な本当らしさを体験するのである。次にこの手法がより様式化されたかたちで説話行為のなかに組み入れられた例として、白土三平の『サスケ』(図3)を考えてみたい。

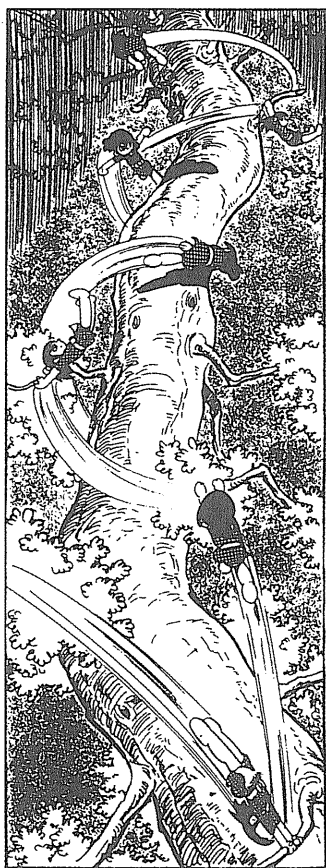


図3 白土三平『サスケ』

第8巻(小学館・1969)

このコマでは四貫目を名乗る謎の忍者に追いかけられた少年忍者サスケが、それをふり切るために恐ろしい速度で樹木に駆け登っていくさまが、合計して七体のサスケの映像によって表現されている。ここでは『ああ播磨灘』の場合とは違って、この素速い動作を

G

的にとらえる視座は一定しており、揺らぎがない。ひとつひとつのサスケの姿はことごとく違って、それなりに優雅であり、二人の力士の、視る角度を別とすればほとんど変化のない三つの姿勢とは好対照を示している。

白土三平による少年忍者のコレオグラフは、マイブリッジの連続写真ほどに

H

い。木に登るといふ運動を細分化しながらも、運動の個々の相を代表する

I

み合わせているといった印象がある。時間の

J

的な分節ではなく、運動の優雅な分割が問題とされているのだ。

⑤ 白土はこうした漫画における速度表現の手法を、きわめて独自なかたちで挿話のレヴェルへともちあげてみせた。『風の石

丸』『忍者武芸帖』の主人公たちがときに敵を攪乱するために披露する「分身の術」は、こうした漫画独自の表現に由来している。同一人物の複数の姿をひとつのコマに描く手法と、彼が何人もの人物に分裂して敵を欺くという忍術が、ここでは故意に重ねあわされているのだ。白土の考案した忍法とは、彼がしきりに説く

K

的・土木工学的解説にもかかわらず、きわめて漫画の手法に密着したものである。そこにおいて興味深いのは、それが歴史における人物の没個性、代替可能性といった世界観と結合している点である。

さて、こうした「異時同図」の漫画につきあわされたあとで、登場人物の運動が複数のコマに分割された漫画に目を移してみると、コマという約束事のあり方が目立って新鮮に見えてくるはずだ。

楠勝平の「空にて」(図4)では、ふと手を滑らせて落下する曲芸師の動きが細かに分節され、一画面に十二のコマを用いて描かれている。あたかも映画のコマを並べたかのように並べられたコマの内部では、『ああ播磨灘』や『サスケ』のように運動の速

度を示す補助線がいつさい省略されており、また音声を消滅している。したがって動作を細かく区切っているにもかかわらずここで演出されているのは、先に掲げた二作品とは逆に、映画の高速撮影に似た緩慢な速度の印象である。

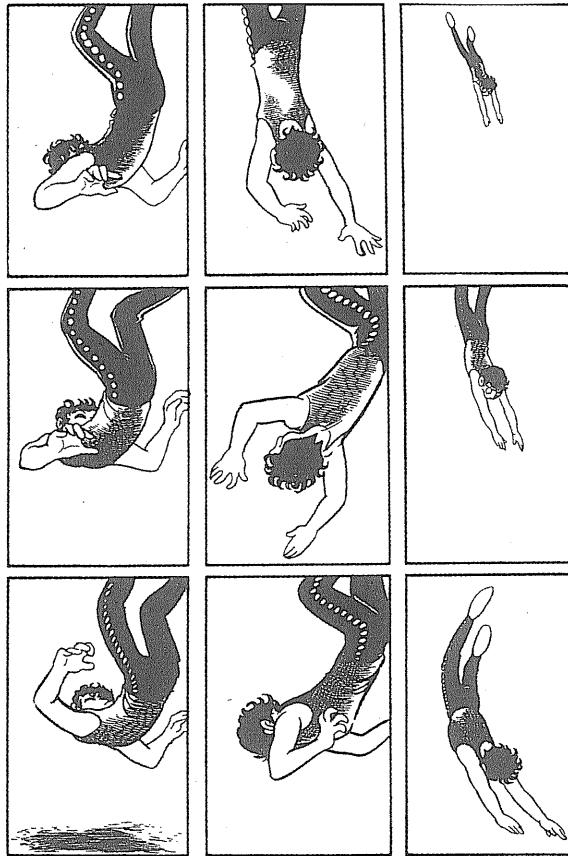


図4 楠勝平「空にて」(「COM」・1970・2)

「空にて」のコマが描く曲芸師の軀からだは『サスケ』のように運動のある頂点を優雅につないだものではない。それはマイブリッジの連続写真に似てほんの微かな差異しかもたず、そのため漫画として不思議な異化効果*が生じることになる。とりわけ最後のコマで下方にうつすらと主人公の影が映るとき、この頁の左下端まで読み終えた読者にはある不吉な予感にとらわれる。こうした未決定の微妙な感情は、画面がコマ線によって分割され、視線が一定の順序を踏襲して進むことを要求されたときに、はじめて漫画に許されたものであった。

(四方田犬彦『漫画原論』による)

(注) *画面とコマの分割……漫画の最小単位であるコマの複合によって画面が構成される。

*コレオグラフ……動作の振り付け。

*マイブリッジの連続写真……一連の動作の分解写真。写真から映画への過渡的な技術とされる。

*異化効果……日常的に見慣れたものを異様なものに見せる効果。

問一 傍線 a、b のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線①「異時同図」を説明した次の文の空欄Ⅰ、Ⅱに入る二字の語をそれぞれ本文中から探して書きなさい。

連続した時間の経過のなかで

Ⅰ

する複数の動作を、同一の空間内部に

Ⅱ

的に存在するものとして描く手法

問三 図1を手掛かりに、空欄A～Eに入る説明の適切な組み合わせを次の中から一つ選びなさい。

イ 夢のお告げを得て慌てて飛び起き、大仏にむかって静かに感謝の気持ちを献げている

ロ 両手を高く揚げて合掌し、一生懸命に大仏に祈願している

ハ 石段に立って、お告げの命じた方向に旅立とうとしている

ニ 石段を降りきってひと休みする

ホ 殿の内側の畳に横たわって、大仏と対峙する姿勢で眠る

1	A―ニ	B―ロ	C―ホ	D―イ	E―ハ
2	A―ロ	B―ホ	C―イ	D―ハ	E―ニ
3	A―ハ	B―ニ	C―ロ	D―ホ	E―イ
4	A―イ	B―ハ	C―ニ	D―ロ	E―ホ
5	A―ホ	B―イ	C―ハ	D―ニ	E―ロ

問四 空欄Fには、次にその一部を示した絵巻物の作品名が入る。その作品名を漢字で書きなさい。



問五 傍線②「漫画に先立って、別個に自律した物語なるものが存在し、それが一定の手続きを経て、手際よく「漫画化」を施される」とあるが、これはどういう意味か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

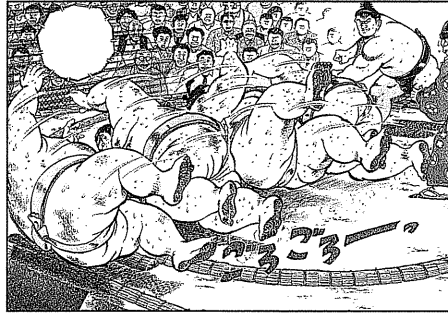
- 1 様々に展開する可能性を秘めた複数の物語のなかから、最も面白いものが漫画化されるということ。
- 2 漫画というフィクションの世界は、ドラマティックな現実世界の模倣に過ぎないということ。
- 3 漫画が実際に描かれる前に、まず漫画家によって作品のストーリーが考案されるということ。
- 4 漫画とは自立した独自のジャンルではなく、その基底にある物語の一つの表現手法に過ぎないということ。
- 5 漫画というカテゴリーが成立する前に、演劇や小説という由緒正しい物語の歴史が存在したということ。

問六 傍線③「漫画のなかに流れている時間」とあるが、次の中でその例として不適切なものを一つ選びなさい。

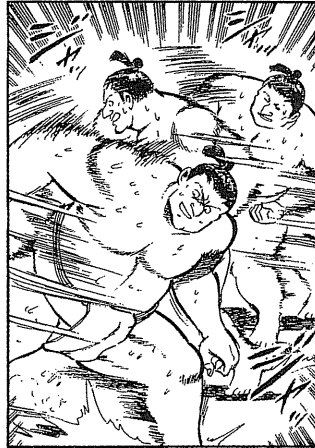
- 1 あるコマを理解するためのカギとなる出来事が描かれた前のコマを見つけて出すために要した時間。
- 2 ある頁の最後のコマがあまりにも恐ろしくて、次の頁をめくるのをためらったために過ぎてしまった時間。
- 3 あるコマに描かれた情景と、自分のかつての経験が酷似しているために読むのを中断して物思いに耽った時間。
- 4 あるコマに描かれた風景が、どの場所をモデルにしたのかが気になり、それを調べるのに掛かった時間。
- 5 あるコマに描かれた主人公が後のコマで苦労を積み、紆余曲折を経て栄達を遂げるまでに経過した時間。

問七 傍線④「図2」のコマとして適切なものを、本文の説明を手掛かりにして次の中から一つ選びなさい。ただし、吹き出しの中のせりふは削除してある。

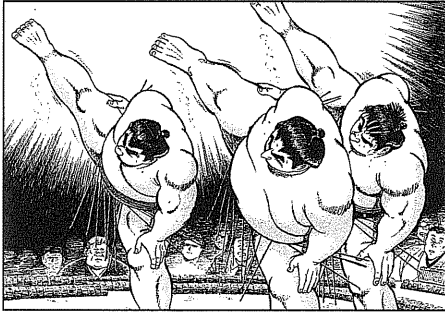
1



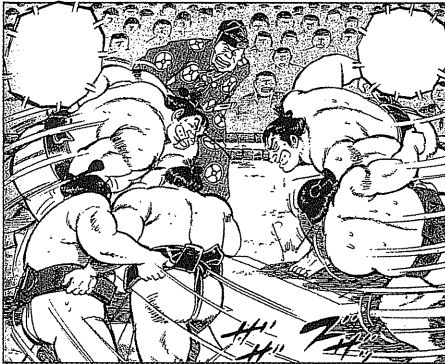
2



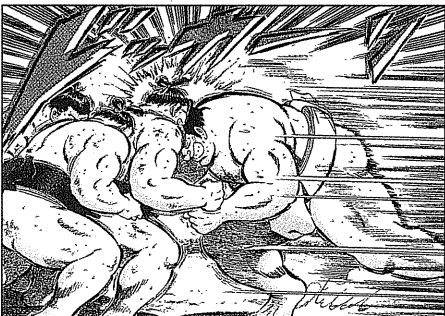
3



4



5



問八 空欄G、Kに入る語の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|
| 1 | G—無機 | H—典型 | I—機械 | J—科学 | K—連続 |
| 2 | G—科学 | H—連続 | I—無機 | J—典型 | K—機械 |
| 3 | G—機械 | H—科学 | I—連続 | J—無機 | K—典型 |
| 4 | G—典型 | H—機械 | I—科学 | J—連続 | K—無機 |
| 5 | G—連続 | H—無機 | I—典型 | J—機械 | K—科学 |

問九 傍線⑤「こうした漫画における速度表現の手法を、きわめて独自なかたちで挿話のレヴェルへともちあげてみせた」とあるが、どういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 速度表現という漫画の技法を未熟な水準から優雅な芸術の域にまで高めて見せたということ。
- 2 速度表現のテクニックに過ぎなかったものを、「忍法」という漫画の内容に仕立て上げたということ。
- 3 速度表現を物語の本筋で使用するのではなく、エピソードの中で実験的に多用したということ。
- 4 それまで描画の手法に過ぎなかった速度表現に対して、科学的な説明を初めて与えたということ。
- 5 漫画の一手法であった速度表現を、漫画以外のジャンルでも使える普遍的な方法に高めたということ。

問十 傍線⑥「ある不吉な予感」とあるが、具体的には何を意味するか。五字以内の言葉で答えなさい。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日曜の晩のメドラーノの曲馬。子供の数が大そう少いのは、夜の興行だからであろう。

曲馬はこれを見るごとに、およそ平衡を失わなければ、どんな危険を冒しても安全だと語っているように私には思われ、また、どんな不可能事の実現と見えるものなにも、厳然と平衡が住んでいることを教えられるのである。

われわれは肉体の危険にもまして、たびたび精神の危険を冒す。そのときわれわれは曲芸師のようにかくも平衡に忠実であろうか。曲芸師が綱から落ち、曲芸師の額から皿が落ちるときに、われわれは彼等があやまって肉体の平衡を冒したことを如実に見るが、われわれが自ら精神の平衡を失うさまは、これほど如実に見ることはできないので、それだけ危険は多く且つ重大である。

曲芸師は肉体の平衡を極限まで追いつめて見せる。しかしかれらはそのすれすれの限界を知っており、そこでかれらは引返して来て、微笑を含んで観衆の喝采に答えるのである。かれらは決して人間を踏み越えない。しかしわれわれの精神は、曲芸師同様の危険を冒しながら、それと知らずにやすやすと人間を踏み越えている場合があるかもしれない。

思惟が人間を超えうるかどうかは、困難な問題である。超えうるという仮定が宗教をつくり、哲学を生んだのであったが、宗教家や哲学者は正気の埒内うちにある限り曲芸師の生活智をわれしらず保っているのかもしれない。もし平衡が破られたときは失墜がすでに起っており、精神は曲馬の円い舞台に落ちて、すでに息絶えているかもしれないが、そのうち肉体が永く生きつづけるままに、人々は彼の死を信じないにちがいない。

狂気や死にちかい芸術家の作品が一そう平静なのは、そこに追いつめられた平衡が、破局とすれすれの状態で保たれているからである。そこではむしろ、平衡がふだんよりも一そう露わなのだ。たとえばわれわれは歩行の場合に平衡を意識しない

が、綱渡りの場合には意識せざるをえないのと同じである。

今宵、私は綱渡りを見なかった。その代りに組合せた十五の椅子を、口で支えてみせる男や、空中高く同僚の齒に体を吊して煽風機のように身を廻してみせる男や、額の上に十の燭台を重ねて載せ、その上に蠟燭を投げ上げてみせる男や、女を片手の掌の上に直立させてみせる男を見た。

なかんづく面白いのは海驢あしかの曲芸で、それを子供のころハーゲンベック・サーカスで一度私は見ている筈であるが、海驢が鼻先にゴム毬まりをのせ、投げ上げられたそれを同僚の鼻先が見事にうけとめたりするのである。或る海驢はオリムピアードの選手のように、松明aを鼻にのせて卓上にのぼってゆき、或る海驢は鼻に大きなゴム毬をのせたまま逆立をしてみせる。なかに一匹出来のわるい海驢がいて、同僚の番のときに自分が出て行ったり、自分の番になるとしくじったりしながら、同僚がむつかしい曲技に成功すると、身をくねらして、真先に両鰭ひれで拍手をした。

海驢の体はセピアいろの光沢を放ち、この上もないほど柔軟性に富んでいる。それが鼻先に毬をのせたまま階段を上り下りする時、身をくねらして平衡を保っている筋肉の滑らかな運動が、薄い皮膚の下にありありと見える。平衡を保つに適した精神も、海驢の体のような柔軟性に富んだものでなくてはなるまい。

水陸両棲のこの獣のふしぎな柔軟性に、曲芸師たちの訓練された肉体は近づこうと努力している。しかし悲しいかな、人間の肉体も精神も、このような危険な均衡のためにだけ生きているのではない。曲芸師は単に一個の **A** であって、満場の観衆は感嘆し、拍手を吝おしまないが、誰も曲芸師を羨んだり、曲芸師になりたいと思つて見物しているわけではない。

われわれの精神もこうした危険な平衡を保つためにばかり訓練されると、遂にはそれが **A** 的なものに墮おしてしまふ危険がある。③ 調教は熟練を要求するが、熟練が時として技術に固定してしまうのは自然である。のみならず海驢と違ってわれわれの内部では、いつも肉体と精神が対立しており、一方がのさばり出すと、一方は不器用にならざるをえない。

危険はわれわれの精神をして平衡へ赴か^bしめる。しかしそれは予期^④された危険であつてはならないのだ。反復される危険も危険であることには変りないけれど、それはいつしか抽象的な危険になる。あの危険、この危険、今の危険、この次の危険、それから一つの抽象的な危険が編み出されてくる。しかしわれわれの生きている精神が会うべき危険は、具体的な危険でなければならぬのだ。

肉体と精神とは、やはり男と女のようにちがつている。肉体はわれわれの身を護り、もし精神の異常な影響がなければ、進んで危険へ赴くものではない。肉体はわれわれを病菌や怪我から護り、これらに一度冒されれば、抗毒素や痛みや発熱でもって、警戒と抵抗を怠らない。しかし精神は自ら進んで病気や危険に赴く場合があるのだ。というのは、精神は時としてその存在理由を示さねばならぬ必要から、危機を招いてみせる必要に迫られる場合があり、さもなければ、われわれの精神は頑強に、おのれの存在を信じようとしな^cいかもしれないのである。

実に奇妙なことだが、それは事実である。むしろそれは精神の本質であつて、肉体が存在するようには精神は存在せず、精神は自分の存在を疑うところに生れて来たのだから、むしろそれは常態なのであるが、この常態が永くつづくと、精神は反対の力、自己証明の力でもって、これと平衡を保とうと試みる。生きた危機、具体的な危機が要請され、これに直面した精神は、緊張して平衡状態を保つために白熱する。はじめて精神が現前したように思われ、その存在理由は明かになり、危機の中で、一瞬、精神は自分自身を信ずるにいたるのである。

危ういかな、実はこの瞬間こそ、生きた自由な精神の本当の危機なのである。そこでこういう瞬間にこそ平衡を保ちつづけることが、精神の眞の機能であり、精神が眞に存在するという証明になるであろう。

(「アポロの杯」より)

(注) *オリムピアード……オリンピック競技大会のこと。

問一 傍線 a、b の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 傍線①「決して人間を踏み越えない」とあるが、これはどういう意味か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 人間の限界を超えているにもかかわらず、そうしたふりを観客に見せないこと。
- 2 人間の精神の限界を超えながらも、そのつどこちら側に引き返してくること。
- 3 肉体のぎりぎりの平衡を冒して人間の限界に挑戦しようとはしないということ。
- 4 肉体は人間の限界を超えていても、精神は人間の領域にとどまっていること。
- 5 どんな限界に挑戦しても、人間であるという宿命からは逃れられないこと。

問三 傍線②「危険な均衡」を説明した次の文の空欄に入る十七文字を本文中から抜き出しなさい。

危険な均衡とは、それが ことである。

問四 空欄 A に入る語として適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 精神
- 2 物体
- 3 危機
- 4 職業
- 5 偶像

問五 傍線③「調教は熟練を要求するが、熟練が時として技術に固定してしまう」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 たゆまぬ訓練と努力の結果獲得したものに安住して、それ以上の緊張や向上を求めなくなってしまうこと。
- 2 長年に渡りたえまなく調教されることで肉体が疲労し、精神との釣り合いが取れなくなってしまうこと。
- 3 本来特別な能力であったものが、同じ訓練を繰り返すことで他者も模倣できる技術になってしまうこと。
- 4 変化のない訓練が反復されると、肉体がそれに慣れ、繊細な技を要求される曲芸ができなくなってしまうこと。
- 5 調教にはたゆまぬ努力が必要であるが、完成までの道のりは遠く、努力そのものが目的と化してしまうこと。

問六 傍線④「予期された危険」と反対の意味を持つ六字以内の言葉を本文中から抜き出さない。

問七 傍線⑤「これ」は何を指すか。次の説明の空欄に入る十五文字を本文中から抜き出さない。

精神が

こと

問八 傍線⑥「精神の眞の機能」とあるが、どういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 危機を何度も乗り越えることで精神の修行に励み、肉体を自由自在に操ること。
- 2 訓練を積むことで肉体のみならず精神においても、海驢のような柔軟性を体得すること。
- 3 どのような危機にも打ち勝つことで、比類なき精神の絶対的境地に至ること。
- 4 あらゆる危機を想定し、準備をすることで、精神が余裕をもつて対処できること。
- 5 不意に訪れた危機に対し精神の均衡状態を作り出し、その存在を明らかにすること。

問九 本文「アポロの杯」の筆者は、昭和を代表する日本の小説家であると同時に、「文化防衛論」「葉隠入門」などの評論も書いている。この筆者の名前を次の中から一つ選びなさい。

- 1 川端康成
- 2 三島由紀夫
- 3 小林秀雄
- 4 太宰治
- 5 谷崎潤一郎

三

次の文章は『蜻蛉日記』の一節で、作者は夫の来訪を待つ期間が長引いていることを嘆いている。これを読んで、後の問に答えなさい。

かくながら二十余日になりぬるこち、せむかた知らず、あやしきおきどころなきを、いかで涼しきかたもやあると心もべがてら浜づらのかたに祓もせむと思ひて、唐崎へともものす。

A の時ばかりに出で立つに、月いと明し。わがおなじやうなる人、またともに人ひとりばかりぞあれば、ただ三人乗りて、馬に乗りたるをのことも七八人ばかりぞある。賀茂川のほどにて、ほのぼのと明く。うち過ぎて、山路になりて、京にたがひたるさまを見るにも、このごろのこちなればにやあらむ、いとあはれなり。いはむや、関にいたりて、しばし車とどめて、牛かひなどするに、むな車引きつづけて、あやしき木こりおろして、いとをぐらき中より来るも、こちひきかへたるやうにおぼえていとをかし。関の山路あはれあはれとおぼえて、行先を見やりたれば、ゆくへも知らず見えわたりて、鳥の二つ三つゐると見ゆるものを、しひて思へば、釣舟なるべし。そこにぞ、え涙はとどめずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、まして異人はあはれと泣くなり。はしたなきまでおぼゆれば、目も見あはせられず。

* 行先多かるに、大津のいともむつかしき屋どもの中に、引き入りにけり。それもめづらかなるこちしてゆき過ぐれば、はるばると浜に出でぬ。来しかたを見やれば、湖づらに並びて集まりたる屋どもの前に、舟どもを岸に並べ寄せつつあるぞ、いとをかしき。漕ぎゆきちがふ舟どももあり。行きもてゆくほどに、B の時果てになりにたり。しばし馬ども休めむとて、清水といふところに、かれと見やられたるほどに、大きな棟の木ただひとつ立てるかげに、車かきおろして、馬ども浦にひきおろして、冷やしなどして、「ここに御破子待ちつけむ。かの崎はまだいと遠かめり」と言ふほどに、幼き人ひとり、疲れたる顔にて寄りゐたれば、餌袋なる物取り出でて食ひなどするほどに、破子もて来ぬれば、さまざまあかちなどし

て、かたへはこれより帰りて、「清水に来つる」と、おこなひやりなどすなり。

(中略)

いとほせばき崎にて、下のかたは、水際に車立てたり。あみおろしたれば、しきなみに寄せて、なごりには、なしと言ひふるしたるかひもありけり。しりなる人々は、落ちぬばかりのぞきて、うちあらはすほどに、*くんげ天下の見えぬものども取り上げまぜて騒ぐめり。若きをのこも、ほどさし離れてなみあて、「*ささなみや志賀の唐崎」など、例のかみご多ふり出だしたるも、いとをかしう聞こえたり。風はいみじう吹けども、木陰なければ、いと暑し。⑤いつしか清水にと思ふ。Cの終はりばかり、果てぬれば、帰る。

ふりがたくあはれと見つつゆき過ぎて、山口にいたりかかれば、Dの果てばかりになりたり。ひぐらしさかりと鳴きみちたり。聞けば、かくぞおほえける。

⑥なきかへる声ぞきほひて聞こゆる待ちやしつらむ関のひぐらし

とのみ言へる、人には言はず。

(注) *唐崎……琵琶湖の西岸の崎の名。祓をするところがある。

*わがおなじやうなる人……私と境遇の似ている人。

*牛かひ……牛車の牛に餌や水を与えること。

*行先多かるに……行く先までの距離が長くて。

*御破子待ちつけむ……お弁当の届くのを待ちましょう。「破子」は食物などを入れる箱。

*餌袋……もとは鷹の餌を入れるものだが、ここでは旅行用の食料を入れている。

*天下の見えぬものども……漁師の捕ったもので、見たこともないような魚貝類。

*ささなみや志賀の唐崎……神楽歌の歌詞。

問一 この文章に描かれているのは一日の外出の行程である。空欄A～Dに入る語の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|
| 1 | A—丑 | B—寅 | C—辰 | D—亥 |
| 2 | A—卯 | B—辰 | C—午 | D—戌 |
| 3 | A—子 | B—卯 | C—巳 | D—午 |
| 4 | A—寅 | B—巳 | C—未 | D—申 |
| 5 | A—辰 | B—巳 | C—亥 | D—子 |

問二 傍線①「このごろのここち」とはどのような心境か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 だんだん暑くなるので少しでも涼しいところに行きたい。
- 2 私と似たような状況の人がいるので何とか慰めようと思う。
- 3 寂しく孤独感にさいなまれて何事にも感じやすくなっている。
- 4 京の都では水辺が見えないので広々とした風景を見たい。
- 5 有名な唐崎で六月祓をしにぜひ出かけて行ってみたい。

問三 傍線②「こちひきかへたるやうにおぼえていとをかし」とあるが、なぜ「をかし」と感じたのか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 外出して珍しい外の光景を見ることで鬱屈した気持ち少し晴れたから。
- 2 空の荷車を引いて木を切り出して運ぶなどとは想像もつかなかったから。
- 3 逢坂の関の山路の様子が都とは違うのでそちらの方に興がわいたから。
- 4 牛車を引いている牛に餌をやる様子がおもしろくしばし憂いを忘れたから。
- 5 山の中なのに暗い夜道をやってくる車があるとわかって意外に思ったから。

問四 傍線③「釣舟なるべし」の「べし」と文法的に同じ意味のものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 住む館より出でて船に乗るべき所へ渡る。
- 2 少納言の乳母とぞ人いふめるはこの子の後ろ見なるべし。
- 3 家の作りやうは、夏をむねとすべし。
- 4 ゆめゆめ人にこのこと知らしむべからず。
- 5 せちに聞こえさすべきことなむある。

問五 傍線④「幼き人」とは具体的には誰のことか。正しいものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 藤原兼家
- 2 藤原定家
- 3 藤原倫寧
- 4 藤原道長
- 5 藤原道綱

問六 傍線⑤「いつしか清水に」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 いつの間にか清水に来てしまった
- 2 清水に着くのはいつでもいい
- 3 少しでも早く清水に着きたい
- 4 やつとので清水にたどり着いた
- 5 いつまでもずっと清水にいたい

問七 傍線⑥の「なきかへる声ぞきほひて聞こゆる待ちやしつらむ関のひぐらし」とある歌の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 逢坂の関でひっきりなしに鳴くひぐらしの声は私の帰りを待つ夫の声のように聞こえる。そこで私も蝉と声の大きさを競って泣いて帰る。
- 2 逢坂の関のあたりは山が迫っていて涼しく、ひぐらしもなかなか鳴くことができなかつたのか。暑い季節の到来を待つて競うように鳴いている。
- 3 逢坂の関のひぐらしの声と競い合うように私も同行の人も泣いている。蝉もそれを知っていてわれわれが帰るのを待っていたのだろうか。
- 4 逢坂の関ではひぐらしがしきりに鳴いているが、その声は泣きながら帰る私と競っているように聞こえる。私を通るのを待っていたのだろうか。
- 5 逢坂の関に差しかつたのは涼しい夕方、ひぐらしが一斉に鳴き始めた。夫を待つ私と競い合うように誰かを待つて鳴いているのだろうか。

問八 この場面を通して、作者は本文に描かれているこの日の外出をどのように思っているか。もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 外の風景を見て気を紛らわすことはできたが、心の奥の嘆きが消えることはなかった。
- 2 同行の人の嘆きの深さに比べれば、私の悲しみなどたいしたことはないと思えてきた。
- 3 自然の懷に抱かれて心が癒され、私の悩みなどとるに足らないものだと思えてきた。
- 4 都にはいない人々の生活を見ることで新鮮な気持ちになり、自分の悩みを見つめ直した。
- 5 涼しい郊外の水辺に行こうと思ったが、なかなか目的地に到着できず不満が残った。

問九 この作品が書かれた時代についての次の説明文を読み、空欄に入れる言葉を漢字で答えなさい。

平安時代には日本語の表記が大きく変わった。主に男性は E を使ったが、男女を問わず F 文字も使いこなせるようになり、表現の幅が大きく広がった。この作品の作者をはじめとして、この時期の文芸を担った人々は和歌を詠むことから人の心のありように敏感になり、自らの心を見つめる日記文芸も生まれてきた。こうした私的な日記の最初作品として G があるが、これは図らずも文芸とジェンダーの問題を示唆している。

